ジャガイモ

種イモの準備は2月から 初心者でも手軽に収穫できる



用途が広く、知名度抜群の早生品種「男爵芋」

原産地は標高3000~4000mの高原地帯で、涼しい気温を好みます。日本では春や秋に栽培し、苦手な夏と冬はイモの姿でやり過ごします。

春は平均気温が10度の頃に出芽するよう、種イモはその20日ほど前に植え付けます。

この植え付けのさらに20~30日前に始めたいのが「浴 光催芽(よくこうさいが)」です。イモに太陽光を当て、 ずんぐりした芽を作ります。出芽や生育がそろい、病気予 防にもなり収穫するイモの品質や収量が高まります。

出芽後10日ほど、土の中では種イモから伸びた茎の少し上の部分からイモになる茎(ストロン)が横に伸びてきます。さらに10日ほどでストロンの先にイモができ始めます。この2回のタイミングで土を足します。茎葉が黄変してから収穫すると品質の良いイモが採れます。

【基本情報】

●分類: ナス科ナス属

●原産地:南米ベネズエラからアルゼンチン北部にかけての高原地帯

●萌芽適温(地温):15~20度●生育適温(気温):15~20度●日当たり:日なた/半日陰

【病害虫情報】

●好適pH:5.0~6.5

アブラムシ類: ウイルス病などを媒介。早めに薬剤を散布し、発生前 に収穫する。

ニジュウヤホシテントウ: 背中に28個の黒い斑点のあるテントウムシ。 5月中旬以降に増加。葉を食害する。

ジャガイモの栽培方法

1. 浴光催芽と種イモの調整

浴光催芽の頃、外はまだ寒いので、処理は日当たりの良い室内で行う(写真1)。60gを超える種イモは、植え付けの3~5日前に芽の集まった頂芽部分を中心に1片が30~60gになるよう縦に切り分ける(写真2)。植え付け後に切り口から腐らないよう、切り口は乾かしコルク化させておく。

ポイント

60g未満の小粒の種イモを使えば、調整やそれによる病気の感染もなく便利。

2. 種イモの植え付け

コンテナは、14L程度の市販の培養土の袋をそのまま使う。後で約15cm分の土(約6L)を足す(増し土)ので、その分の土はよけておく。 袋の底に水抜きのための穴を4、5カ所開け、口は縁を巻き下げる(写真3)。 次に植え穴を8~12cmの深さで掘り、そこへ化成肥料(NPK各成分8-8-8)約17gを入れる。周りの土を3cmほど戻し、土の表面からイモまでの深さが3~5cmになるよう種イモ1個を植え付け(写真4)、適宜水やりをする。

ポイント

種イモは頂芽が上に、切り分けた場合は切り口を下にして植え付ける。

3. 増し土と追肥

出芽後10日で厚さ5cm分の土(約2L)を足し、ストロンが伸びるスペースを確保する。このとき、化成肥料(8-8-8)約7gを施しておく(写真5)。 さらに10日で縁を上げて厚さ10cm分の土(約4L)を足してイモが緑色になるのを防ぐ(写真6)。

ポイント

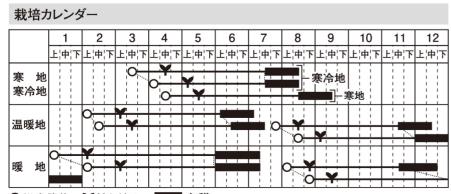
植え付け後20日ほどで土から芽が出始める。出芽後7日以内に元気の良い茎を3、4本残し、 他は株元を手で押さえ引き抜く。

4. 収穫

茎や葉が完全に黄色くなり、茎が倒れる頃、晴れた日に掘り出すことで、でんぷんが豊富で 貯蔵性の高いイモが収穫できる(写真7)。

ポイント

収穫したイモは、半日ほど陰干しして、土を落とすと保存性が高まる。



○ 浴光催芽 ▼植え付け ■■■ 収穫













